

第2回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「真夜中の冒険」

茨城県立水戸第三高等学校二年 平沢美佳



賢治のまちから
高校生★童話大賞



『真夜中の冒険』

茨城県立水戸第三高

等学校二年 平沢美佳

たとえば。

あなたの家の冷蔵庫で迷子おぼけが泣いていたら…。

ゆかちゃん一家は三日前、青葉通り六番地のこの家に引っ越して来ました。

真っ白な壁が夏の空によく似合うとてもすてきな家です。

でもひとつだけ他の家とは違うところがありました。それは前の人が置いていった大きな冷蔵庫があることです。ゆかちゃんのお母さんはこの大きな冷蔵庫がとても気に入りました。だから引っ越し先はこの家に決まったのです。

引っ越しをして四日目、ゆかちゃんは真夜中に目を覚ましました。

「ちよつとのどが渴いたからお水でも飲んでくるね。」

一緒に寝ているうさぎのぬいぐるみのミミーにそう言うと、キ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ツチンに向かいました。コップを手にとり、蛇口を開こうとした時、冷蔵庫の中から

「シクシク、パパ、ママ。」

という声が聞こえたのです。ゆかちゃんはびつくりして、危うく手に持っていたコップを床に落としそうになりました。そのコップを静かにもどして急いで冷蔵庫に駆け寄りました。そしてドアをノックしました。すると、

「トントン、入ってます。」

答えが返ってきました。まるでトイレみたい、ゆかちゃんは少しおかしく

なって笑いました。そして冷蔵庫のドアを開きました。なんと、そこには白くてスケスケなチビおばけがいたのです。

「きやあ。」

ゆかちゃんもおばけも小さく悲鳴をあげました。

「どうしてあなたまでおどろくの？あなたおばけじゃないの？」

ゆかちゃんは思わずおばけに話かけました。するとおばけはおどろいた顔で、

「どうして僕がおばけだって分かるの？まだおどかさ練習もして



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ないのに。」と反対に聞き返してきました。

「だって、絵本で見たおぼけの子供にそっくりだもん。白くてスケスケで。で

もどうしてこんなところにいるの？」

それを聞いたおぼけはまた泣き始めました。

「どうしたの？ どこかいたいの？」

心配そうにゆかちゃんが聞きます。

「僕、パパとママに会いたいよお。」

涙を流しながらおぼけは言いました。ゆかちゃんは

「ちよつと待ってて。」

そう言って暗い家の中から一冊の絵本を持ってきました。

「もしかしたらこの中にあなたのパパとママがいるかもしれない
と思って。」

ゆかちゃんは「おぼけ大集合」という絵本のページを開きおぼけに見せて

あげました。すると、

「あ。僕のパパとママだ。」

おぼけはうれしそうに言いました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「ところで、あなたの名前は？どこから来たの？年はいくつ？男の子？」

「それとも女の子？」

ゆかちゃんは今まで一度もおばけを見たことがなかったので興味しんしんです。でもおばけの方はあんまりたくさん質問をされたので頭から小さな「たつまき」を出して冷蔵庫の中をめっちゃくちゃにしまいました。おばけは困ってしまうと頭からたつまきを出すという性質があったようです。少したってからおばけは自分のことを話し始めました。

「僕の名前はヒュー。うらめし幼稚園に通ってるんだ。」

それを聞いたゆかちゃんは「おばけ大集合！」の本を開いて指をさしながら言いました。

「うらめし幼稚園？この絵本に出てくる？じゃあ、ヒューは絵本の中からきたの？」

ヒューはまじめな顔になって、

「そうかどうかは分からないけど、園長先生の部屋で大きな本を見付けたんだ。」



賢治のまちから 高校生★童話大賞

それを開いたら本の中に吸い込まれて。気付いたらこの中で眠っていたんだ。」

なんということでしょう。ヒューのいた世界と人間の世界はゆかちゃんの家の冷蔵庫でつながっていたのです。

その夜、ゆかちゃんとヒューはたくさん話をしました。そしてヒューがこっちの世界にきたのは満月の夜だったことがわかりました。満月といったらまだ一週間以上も先です。ゆかちゃんはヒューがお父さんやお母さんに見つからないかドキドキしてその一週間を過ごしました。

しかし、今月が満月の夜という時、ゆかちゃんは不思議なことに気がつきました。それはヒューのバパとママがいる絵本のおはなしが変わっていることでした。確かに一週間前はおばけの国の紹介やおばけの生活の様子がかいてあったのに、今ではおばけの国に悪魔がやってきておばけの国がほろぼされてしまうというおはなしに変わっていたのです。

「ヒュー、これを見て。おはなしが変わっているの。」

「本当だ。この前見たときにはみんな笑っていたのに。どうしてだろう。僕が人間の世界にきちやっただからかなあ。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

そう言ってヒューは目を涙でいっぱいにしました。そんなヒューを見てゆかちゃんは、

「おばけのくせに泣き虫なんだから。早くおばけの国に帰っちゃえ。」

といっけいいきおいよく冷蔵庫のドアを開けました。ちょうどその時、雲にかくれていたまん丸のお月さまが顔を出して大きな大きなあくびをしました。するとヒューだけでなくゆかちゃんまでも冷蔵庫に吸い込まれてしまいました。

ドスン。すごい音がしてゆかちゃんは床に落っこちました。ヒューは床から一メートルくらいのところにフワフワ浮かんでいます。

「おばけの世界じゃ僕は飛べたんだっけ。ゆかちゃん、大丈夫？」

そう言ってヒューは小さなスケスケの手をさしのべました。ゆかちゃんはそれにつかまり、えいっと立ち上がりました。そしてあたりを見回すと、そこはうらめし幼稚園の園長室だったので。でもゆかちゃんは泣いたりしませんでした。それよりも窓の外



賢治のまちから
高校生★童話大賞

景色にとってもおどろいたからです。

「ヒュー、これがおばけの国なの？絵本で見たのと全然違う。そこらじゅう岩だらけだし、おばけなんて一匹もないよ。」

ヒューもあわてて外を見ました。

「こんなの本当のおばけの国じゃないよ。僕の家に行ってみよう。」

そうして二人はヒューの家に行ってみることにしました。

ヒューの家はいくつもの塔があり、壁には宝石が埋め込まれ、窓には七色に光るガラスがはめられていてまるでお城のようでした。

「ヒューっておばけの国じゃ偉いおばけなの？」

ゆかちゃんはヒューの背中から降ろしてもらいながら聞きました。

「うん。僕のパパは王様なんだけど、僕はパパと違って何にもできないダメなやつなんだ。」

ちよつとくやしそうにヒューは言いました。

そんな話をしているうちに二人は玄関の大きなとびらの前に着きました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ヒューがとびらにさわると静かに開きました。中は真っ暗で何も見えません。

おぼけでも気味がわるくなりそうです。二人が中に入ろうとした時、突然声がしました。

「またきたのか悪魔め。もう何も残っていやしないんだ。さっさと出ていけ」

ヒューはあわててこう言いました。

「待って、僕だよ、ヒューだよ。その声はヒヤヒヤさんでしょ？」

「おお、その声はヒュー坊ちやま。一体、今までどちらにいたんですか。」

暗やみの中からヒューの三倍はあろうかというおぼけが出てきました。口のまわりには白いヒゲが生えていて、ヒューよりもっと体は白く、これぞまさしくおぼけという感じでした。ヒヤヒヤさんはゆかちゃんを見るなり、

「ギヤヤアアー。」

ものすごい悲鳴をあげました。ヒヤヒヤさんはこれまで一度も人間に会ったことがなかったのです。ヒューは気を取り直して

「ヒヤヒヤさん、一体何があったんですか？僕のパパやママはど



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「ここにいるんですか？」

と聞きました。ヒヤヒヤさんはあつと何かを思い出したような顔で

「王様と女王様が悪魔にさらわれてしまったんです。ヒュー坊ちやまがいなくなった後、急にこの国に悪魔たちがやってきて、美しかった町も木々の生いしげった森も、みんなめちやくちやにしてしまいました。でも、坊ちやま、今パパやママと言いましたね。これからはお父さん、お母さんと呼ぶようにすると私と約束したじゃありませんか。」

ヒューはしまったと思い、あわてて口を開きました。

「じゃあお父さんとお母さんは悪魔にさらわれたんだね。誰かが助けださないとこの国は悪魔にのっとられてしまうよ。どうしよう。」

「誰か？」

すばやく反応したのはゆかちゃんでした。

「誰かじゃなくてヒューあなたが助けに行くべきよ。わたしたち二人で王様と女王様を助けに行きましょう。」

ヒヤヒヤさんも、



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「そうです坊ちゃま。悪魔を消せる花笛を手にする事ができるのは代々の王子だけだと私は聞いたことがあります。南の果てには花の咲きみだれているところがあって、そこに咲くセントドロップという花が花笛のありかを教えてくれるというのを私のひいひいおじいさんから聞きました。さあはやくその花笛でこの国を救って下さい。」

そう言われたヒューは勇気を出し、早遠旅の準備にとりかかりました。その頃ゆかちゃんはヒヤヒヤさんからセントドロップの見分け方を教えてもらっていました。

「まず歌をうたうんですよ。すると一本だけ歌を返してくれる花がある。それがセントドロップなのです。」

「花が歌をうたうんですか？」

ゆかちゃんはとても信じられないという表情をしましたが、ヒヤヒヤさんは続けます。

「花には歌が一番届くんだ。花笛のありかを聞くとときも歌にのせて聞くんだよ。」

ヒヤヒヤさんはたくさんのお話を二人に教えてくれました。そしてヒューはリュックいっぱい荷物を持って



「さあ、ゆかちゃん行こう。僕の背中に乗って。」

「じゃあ、行ってきます。」

ゆかちゃんは外で待っていたヒューの背中にのり二人はセントドロップのところへ急ぎました。

出発して一時間がたちました。するとあたりが急に暗くなりました。そして二人の目の前に悪魔の手下たちがたくさん集まり始めました。

「どうしよう。こんなにたくさんいたらとても逃げられそうにないわ。」

ゆかちゃんが心配そうに言いました。ヒューも同じように頭の中が真っ白になっていました。

「どうしよう、困ったなあ。」

ヒューがそうつぶやいた瞬間、ヒューの頭からたつまきが発生しました。たつまきはヒューのリュックの中身をそこら中にバラまきました。ゆかちゃんは必死にヒューから落ちないようにたつまきをよけていました。するとその時、悪魔の手下たちはバラバラにちらばるリュックの中身を追ってみんな一斉に急降下していききました。ゆかちゃんはヒューに「リュックには何が入っていた



賢治のまちから
高校生★童話大賞

の？」

と聞きました。するとヒューは笑顔で

「チョコレートバーやキャンディだよ。」

そうです。悪魔の手下たちは甘い物が好きだったのです。でもヒューはそんなことは知らずに、二人のおやつとしてたくさんのお菓子を持ってきていたのです。

「ヒューのたつまきって役に立つこともあるのねえ。」

ゆかちゃんはちよつとひにくそうに言いました。でも二人は「やったね」と言い合ってまた南へ進み始めました。その後は何事もなく無事に南の果てに着くことができました。

「どうやってセントドロップを探すんだ？」

ヒューは首をかしげました。すると

「わたしにまかせて。」

ゆかちゃんが力強く言いました。そして歌をうたいはじめました。

「ラララ〜ラ〜ララ セントドロップはどこにいるのその顔を見せて。」

ヒヤヒヤさんを信じてゆかちゃんはうたいます。するとどうでし



賢治のまちから
高校生★童話大賞

よう

「ラララ〜ラ〜ララ 私はこちらよ探しているのはだあれ。」

とてもきれいな声で返事が返ってきました。

「わたしはゆか あなたにヒューのお父さんとお母さんを悪魔から助けだすお手伝いをしてほしいの〜。」

メロディーはぐちゃぐちゃだったけどゆかちゃんの言葉はセントドロップには届いたようです。セントドロップは、

「さあ、はやく私をつみとって。そうすれば私は悪魔を消せる花笛になるから。」

「えっ、つみとったら死んでしまうよ。」

二人は急に悲しくなり涙を流しました。するとセントドロップは

「大丈夫。あなたたちの涙が土をしめらせてくれたから、私は干年後にまた復活できるわ。さあ、はやくつみとって。お父さんとお母さんが大変なんでしょう。」

そう言ってセントドロップはヒューによってつみとられ、花笛へと姿を変えました。二人は涙をふき、悪魔の城に向かいました。

だんだん近づくにつれ空は曇り、雷が鳴り始めました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「もうすぐ見えてくるぞ。」

ヒューがそう言った時、二人のまわりをどす黒い雲がつつみこみました。

「きゃあ。何なのコレ？」

ゆかちゃんの声が空にひびき、二人が気付いた時にはもう悪魔の城の中でした。しかも、太い鉄柵に囲まれた檻の中でした。黄金に光る玉座にはぬめぬめと黒く光る体をもつ巨大な悪魔が座っていました。目は黄色く大きくどこまでも見わたせそうです。手と足には鋭い爪がギラギラとあやしく光っています。そして耳はトゲのように鋭く顔の横いっぱい広がっていて、口からはどす黒いキバがたくさん見えています。

はっとヒューとゆかちゃんは悪魔の座っている玉座から目を離し、床を見ました。なんとそこには石像に変えられた王様と女王様が倒れていたのです。それを見たヒューはあの花笛を取り出しました。花笛に気付いた悪魔たちは一斉に身を引きました。しかし巨大な悪魔だけは違いました。

「そんな花笛などこわくはないわあ。」

と言って襲いかかってきたのです。でも、花笛に悪魔が触れた瞬



賢治のまちから
高校生★童話大賞

間、花笛は白く輝き悪魔の指をとかしてしまつたのです。

「オワアアー、私の指がああー。おい、手下どもやってしまえ。」
手下の悪魔たちは近づこうとせず、城の外へと逃げだして行きました。残つたのは指無し of 巨大な悪魔だけでした。

「今がチャンスだ。」

ヒューはそう思い花笛を吹き始めました。すると悪魔の耳がグニユグニユと音をたてとれ、床に落ちました。それでもヒューは花笛を吹くのを止めません。

「ルルル〜ルル〜ルル〜ルル〜ルル〜」

すると今度は悪魔は立っていらなくなり床にひざまづいて赤いじゅうたんをかぶろうとしています。けれども指の無い悪魔には無理なことでした。そしていつのまにか、その巨大な黒い体は巨大な砂のかたまりとなって床につもっていました。城の外の悪魔たちもきれいさっぱり消えていました。石像に変えられていた王様と女王様はみるみるうちにおぼけにもどっていきます。

「やったね。ヒュー、あなたってやればできるじゃない。かっこよかつたわよ。」

ゆかちやはうれしそうにヒューを見つめました。そしてヒュー



賢治のまちから
高校生★童話大賞

も。

「おかえりなさいませ。」

ヒヤヒヤさんが四人をあたたかく迎えてくれました。そしてヒューとゆかちゃんは王様と一緒に夕食を食べることになりました。やけどしそうなスープ、焼きたてのいい匂いのするパン、もちろん七面鳥の丸焼きだってあ

ります。でもヒューとゆかちはあまり食べる気にはなりませんでした。というより二人とももうすぐくる別れが悲しくてしょうがありませんでした。おばけの国には大きな約束があったのです。それは人間を入れてはいないことでした。王様も女王様もヒヤヒヤさんもゆかちゃんに感謝していましたが約束は守らなくてはなりませんでした。

ヒューとゆかちゃんの二人はうらめし幼稚園の園長室に向かいました。いよいよお別れです。

「僕がもっと大きくなって、自由に人間の世界に行けるようになったらまたきつと会おうね。」

ヒューは目に涙をためて言いました。ゆかちゃんも必死に泣く



賢治のまちから
高校生★童話大賞

のをこらえて言いました。

「また会おうね。いっぱいヒューといられてよかった。」

その時、おばけの国の青いお月さまが顔を出しました。

「もう行かないと。さようならヒュー。」

「さようならゆかちゃん。いろいろありがとう。」

ゆかちゃんはヒューに手を振り園長先生の大きな本のページをゆっくり開きました。ヒューは少し離れたところからその様子を見ていました。ヒューの目からは大粒の涙が流れていました。涙をふこうとしてヒューがうでに顔をうずめた時、ゆかちゃんは本の中に吸い込まれて行きました。

ストーン。気付くとゆかちゃんは大きな冷蔵庫の前に立っていました。ドアを開けてみてもヒューはもういません。ドアを閉めた時ゆかちゃんのお父さんがキッチンを通りかかりました。

「まだ起きてたのかゆか？冷蔵庫なんか見て。もしかしたらおばけが入ってるかもよ。」

お父さんはゆかちゃんをからかったつもりだったのにゆかちゃん
んは

「おやすみ。」



と言うといそいで自分のベッドにもぐりこみました。そしてゆかちゃんは自分のホッペをつねってみました。

「イタイ。…あれは夢じゃなかったんだ。ヒューともう一度会えるといいな。」

そう言ってゆかちゃんは眠りにつきました。

次の日、ゆかちゃんはあの絵本を開いてみました。すると絵本

のおはなしは

元に戻っていて、最後のページにはヒューと王様と女王様、そしてヒヤヒヤさんが並んでにっこり笑っていました。

おわり